

1. もとは隠居部屋だった小部屋を書斎に。おびただしい数の蔵書もそのまま残る 2. 緑や花が絶えない里山の自然に囲まれた旧白洲邸「武相荘」 3. 著作は単著だけでも約80冊を数える。装丁にもこだわり、着物地を使った特装本なども 4. 晩年のお気に入りミッソニを着る 5. 夫白洲次郎氏とのツーショット 6. 母屋の居間には調度品も残り、正子の生活の様子が窺われる



白洲正子(しらすまさこ) 1910年1月7日東京・永田町生まれ。随筆家。33歳のとき、東京空襲を機に終の棲家「武相荘」に移り住む。著書に『お能の見かた』『かくれ里』『西国巡礼』『日本の

たくみ』『両性具有の美』など多数。1997年町田市名誉市民。1998年88歳で没

# 生涯走り続けた 日本の美の探訪者

33歳にして移り住んだ鶴川の地と「武相荘」。その一角にある北向きの小部屋から数々の著作は生み出された。幼少から親しんだ能に生涯向かい合い、それを一つの軸として縦横無尽に日本の美へと分け入って行く。その探訪は終生尽きることなく続いたという。

## 特集 2 随筆家・町田市名誉市民 白洲 正子

冒頭に次のような一節がある。「秘境と呼ぶほど人里離れた山奥ではなく、ほんのちよっと街道筋から離れた所に、今でも『かくれ里』の名に相応しいような、ひっそりした真空地帯があり、そういう所を歩くのが、私は好きなのである」―町田市鶴川に今も残る白洲次郎・正子夫妻が暮らした邸宅「武相荘」。そこに、相通じる趣きを感じる人も多いのではないか。

1910(明治43)年、白洲正子は東京・麹町永田町で樺山伯爵家の次女として生まれた。父・愛輔は実業家・貴族院議員。父方の祖父・樺山資紀は薩摩出身の軍人。政治家で警視総監や海軍大臣を歴任している。正子は自分に薩摩人の血が流れていることを強く感じていたという。幼少より能の稽古に親しみ、14歳のときに女人禁制の能舞台に女性として初めて立つ。「お能を徹底的にしたことが、私の人生にとつてはよかった」と本人が語るように、能は、古典に通じ、日本人の精神世界や美意識に深く分け入っていく後の著作のバックボーンともなっていく。

その後アメリカへ留学。帰国後、19歳で白洲次郎と結婚する。白洲夫妻が鶴川を終の棲家としたのは1942年。百年以上を経た茅葺き屋根の養蚕農家を買収取つてのことだ。折しも太平洋戦争が始まって食料も不足し始めたころのこと。東京での食糧難や空襲を予見してのことでもあるが、正子がかねてから静かな農村に住みたいと思っていたと書いている。

当初は住める状態ではなかったという家を、修繕を重ね、茅葺きの屋根を葺き替えて住んだ。古いものを大切にしつつ、絶えず手を入れながら住まう、そうした暮らしを正子は気に入っていたという。庭には四季を通じて木の花、草の花が咲き、自給自足を志して畑仕事に熱中したとも述べている。

1943年、最初の著書『お能』を刊行。以降、最晩年まで、日本文化全般に関する随筆の執筆に取り組み続ける。戦後は小林秀雄、青山二郎らと親交を結び、文学や骨董の世界に深く踏み込んで、審美眼を深めていった。自らを「好奇心が強く」「何事につけ素手で飛び込んで行く以外にできない性分」と語る正子は、常に自分の眼で見、足を運んで執筆した。東奔西走する姿は晩年も変わらず、数々の名紀行を生んでもいる。骨董の師匠・青山二郎をして「草駄天お正」と言わしめたのは伊達ではない。